

関西弁：外国人から外国人へ

ディビット・ラフィオスカ

この論文は向こうで日本語を勉強している外国人のために書いた。特に日本に行、たことのない外国人にである。向こうで日本のいわゆる標準語（共通語、関東方言）を苦労して学ぶ外国人は初めて日本に来る時にもし最初に着く所が関西地方だ、たらその外国人が非常に驚いてしまう傾向が多いと考えられる。せ、かく数年間日本語を一生懸命勉強してきたのにどうして関西の人間の言葉は別の外国語に聞こえるだろうか。私も初めて関西の方に行、た時ちよ、と言葉に迷、た。もちろん関西弁は標準語と違、うと言、ても全然通じないわけではない。しかしたくさんの相違とが変更はある。それぞれの違、いを全部述べようとしたら百科事典を作り程書き続けられるので、ここで簡潔に四つの点を挙げ、る。それは否定形と文末と単語の相違とイントネーションだということである。外国人がこれをお話みにな、て、関西地方に行、て誤解しないように説明しておきたいと思う。

否定形

外国人が初級の日本語のクラスに入ると色々な簡単な単語を習い始める。たとえば「木」（き）、「本」（ほん）、「上」（うえ）、「下」（した）、「それからもう一つは「変」（へん）である。「変な人」とか「変な味」である。関西地方に行くとよく聞くのは例の「へん」である。けれどもこの場合関西弁の「へん」と共通語の「へん」とは全然違、う。たとえばこの文章を見てみよ

う。「納豆が食べられへん。」これは納豆を食べる時に変わった
 食べる習慣を行うわけではない。関西ではこれが否定形なのである
 。「納豆が食べられない。」という意味を現わす。「ない」
 の代わりに「へん」が使われている。では、共通語の否定形と関
 西弁の否定形を並んで比べてみよう。

例の単語	共通語の否定形	関西弁の否定形
食へ子	食べない	食べへん
泳げ子	泳げない	泳げへん
行く子	行かない	*行けへん
あ子	ない	*あらへん
す子	しない	*せへん
お子	おらない	おらへん
見え子	見えない	見えへん
聞こえ子	聞こえない	聞こえへん
分か子	分らない	分からへん

ほとんど「ない」の代わりにただ「へん」を入れ替えれ
 ばいいけれども時々特別の場合もある。「*」の印は否定形の場合の
 異なる構造を現わす。関西弁の否定形を簡単に説明するのになら
 ないという例外の単語の構造の変化を深く考えなくてもいいと思う。た
 だ関西弁では否定形になると動詞の末尾は「へん」になるというこ
 とを覚えておけば関西弁の否定形が分かるようになってくると思う。

過去否定形になると複雑の問題はない。たとえば共通語の
 「食べなかった」は関西弁に直すと「食べへんかった」となる。

例の単語	共通語の過去否定形	関西弁の過去否定形
食べた	食べなかった	食べへんかった
泳げた	泳げなかった	泳げへんかった
行った	行かなかった	行けへんかった
あった	なかった	あらへんかった
した	しなかった	せへんかった
おった	おらなかった	おらへんかった

見えた
聞こえた
分かった

見えなかった
聞こえなかった
分からなかった

見えへんかった
聞こえへんかった
分かろうへんかった

これで関西弁の否定形が使いこなせるようになったらうか。
。 次は文章の文末も勉強しよう。

文末

もう一つの関西弁の特徴というのは文末にある。基本的には共通語の「...ダ」が関西弁の「...ヤ」になっている。簡単な例を挙げれば「そうダ。」が「そうヤ。」になる。それに従って次のように文末の違いを説明する。「私の家ダヨ。」が「私の家ヤデ。」。こういうふうに共通語の「...ヨ」が関西弁の「...デ」になっている。もし共通語の場合に「...ナシダ」となっているなら関西弁の訳は「...ニヤ」となる。「...ヨ」が付けば「...ニヤデ」となる。助動詞の「...ダロウ」が「...ヤロウ」となる。さっきの文末の説明とちよ、と違って次のような文末もある。「...ワ」という文末はふだん女性語の一つの語になっているけれども関西弁では別の役を持つ。関西弁では「...ワ」は相手に対して自分の意志をはっきり現わすために男性にも使われている。それから相手に何かを確認したりするためである。共通語より関西弁の方が根本的に柔かく耳に当たると感じる方言だとよく言われている。聞くと関西弁は柔軟な言葉であろうという印象が残る。さっき示した「ダ」と「ヤ」の違いを見れば、又は実際に聞けばお分かりになると思う。

単語の相違

多分外国人にとって一番関西弁を聞いて、さっぱり分からない悩みの原因はそれぞれの共通語の単語との相違である。何故かという相違のある単語は全然違つて、似てないからである。最初に代表的な例を挙げるとやはり日本語を学ぶ外国人、誰でも身に付けた共通語の「ありがとう」になるだろう。この「ありがとう」は関西弁には「おおきに」という表現になっている。御覧の通りこの単語は全然違ふね。次のように色々な違いを表わす。

共通語	関西弁
疲れる	しんどい
たくさん	ようさん, ぎょうさん
だめ, いけない	あかん
転ぶ	こける
* バカ	* アホ
食べろ	よばれろ
捨てる	ほろ, ほがす
すごい	ごっつい

絶対に間違つてはいけないのは「バカ」と「アホ」の使い分けである。関東の人間も関西の人間も両方使うけれどもどの場合に使うか注意しないと喧嘩になり可能性がある。関東では「バカ」というのは仲間の間で友達が変なことも言ったりしたりすることに対してのおされたようすを示すためである。本気で怒りを現わすために関東の人間は「アホ」を使う。問題点は関西弁と関東弁とのそれぞれの使い分けは全く反対ということである。関西では「バカ」が罵り言葉となっていて、「アホ」が親しいからかう言葉である。私の個人の意見では両方も使わなければきつと問題にならないはずだと思う。こういう単語の相違が分かるのに覚えろしかない

と思う。関西弁の単語を使えば使うほど早く覚えてくるヤロウ。

イントネーション (抑揚)

四番目の重点は関西弁の異なるイントネーション又は抑揚である。簡単に説明すれば原則的に関西弁のイントネーションは共通語のイントネーションと全く反対だと考えればいい。前述した三点(否定形、文末、単語の相違)を合わせて文章を作ってイントネーションの違いを比べてみよう。線が引いてあるところは高いアクセントを意味する。

例1.) 関東 あしたは行くだらう。

関西 あしたは行くやらう。

例2.) 関東 座敷に上がらないからはなしができない。

関西 座敷に上がらへんからはなしができへん。

例3.) 関東 すごし見ないうちにおおきくなっている。

関西 すごし見いへんうちにおおきくなっている。

もちろん書いた文章での説明が分かりにくいかも知れないが、関東弁と関西弁との間に抑揚の違いがあるということを認識しておけば、関西に行く時にもそんなに困らないと思う。頑張ってください。